

教員は道徳科の授業にどのようなイメージをもっているか

沖林 洋平*¹・池永真依子*²・中川 穂*³・藤永 啓吾*⁴

How do teachers think about teaching moral education?

OKIBAYASHI Yohei*¹, IKENAGA Maiko*², NAKAGAWA Minori*³, FUJINAGA Keigo*⁴

(Received May 31, 2022)

キーワード：特別の教科 道徳、道徳科の授業イメージ尺度、一般化線形モデル

はじめに

附属学校では、『特別の教科 道徳』学びの会（以下、「学びの会」）と題する、教員や一般の教育関係者、教職を志す大学生等を対象にした研究会を継続的に行っている。この研究会では、平成30年度から小学校、平成31年度から中学校で、教育課程における道徳の時間が「特別の教科」化されること（文部科学省、2017）を踏まえて、平成29年度より発足した。研究会のテーマは、道徳科に関する授業づくりの基礎・基本や先人の生き方、ユニバーサルデザインを取り入れた考え方、現代的課題等、教職現場にある課題を広くカバーするものである。表1に、2020年度以降の開催内容を示した。

沖林ら（2020；2021）では、学びの会のテーマの紹介と参加者の学びの会に対する意識の関係を分析した結果学びの会に対して、参加者は高い満足度を得ていること、参加に対する高い継続意志や情報共有の意識、会のテーマや内容の一般化（法定研修で行うことに対する希望）などを得ていることが明らかとなった。

2021年度以降は、学びの会に対する参加者の満足度だけでなく、特別の教科 道徳に関する授業イメージについても調査を行っている。調査項目は、先行研究（沖林ら、2021）の項目を用いた。沖林ら（2021）では、学びの会の参加者は、道徳科の授業を「児童生徒自身の問題を仮説検証や試行錯誤によって解決する時間である」、「道徳の授業は児童生徒自身が自らの価値を発見する時間である」というような創造的・学習者主体的な授業としてとらえていることが明らかとなった。またこのような道徳科に対するイメージは、職務年数によって変動するわけではないこと示された。本研究でも先行研究の調査について追試を行うこととした。本研究で追試を行った理由としては、道徳科の授業に対する学習者主体的なイメージの一般性を確認すること、2020年度以降我が国の学校での授業方法が大きく変化している状況で道徳科の授業イメージがどのようなものであるかを調査するためである。

また本研究の副次的目的として、道徳科における学習者主体的な授業イメージを促進する要因について検討することとした。道徳科における学習者主体的な授業づくりを促進する要因が明らかになることで、道徳科の授業づくりにおける教員に対する学習者主体的な授業づくりのための手がかりを提供することができると考えられる。また、学びの会のような実践性の高い研究会においても教員研修に関する基礎的なデータの提供ができることを示すことで、いわゆる理論と実践、研修の実践と科学的手法によるデータの蓄積の往還関係を示すことができる。

以上のような目的のもと、本研究では学びの会の参加者を対象として、学びの会に対する意識調査を行うとともに、道徳科の授業イメージに関する調査を行った。

*1 山口大学教育学部小学校総合 *2 山口大学教育学部附属光小学校 *3 山口大学教育学部附属山口小学校
*4 やまぐち総合教育支援センター（前 山口大学教育学部附属光中学校）

表1 学びの会の2020年度以降の開催スケジュールと講演者、講演内容

	日時	場所	講演者	テーマ
第8回	2020年6月20日(土)	オンライン	坂本哲彦	おもしろ講義
			森重孝介	小学校の模擬授業
			温品賢二	おもしろ講義
			藤永啓吾	中学校の模擬授業
第9回	2020年8月8日(土)	オンライン	森重孝介	オンライン授業Ⅰ
			藤永啓吾	オンライン授業Ⅱ
			浅見哲也	こだわりの道徳授業
第10回	2020年11月28日(土)	オンライン	久保田高嶺	オンライン授業Ⅰ
			森重孝介	オンライン授業Ⅱ
			鈴木賢一	オンライン授業Ⅲ
			丸岡慎弥	オンライン授業Ⅳ
			藤永啓吾	オンライン授業Ⅴ
			山田貞二	パネルディスカッション
第11回	2021年3月6日(土)	オンライン	森重孝介	オンライン授業Ⅰ
			藤永啓吾	オンライン授業Ⅱ
			永田繁雄	講演
第12回	2021年6月12日(土)	オンライン	藤永啓吾	道徳科と学級運営Ⅰ
			藤永啓吾	道徳科と学級運営Ⅱ
			温品賢二	シンポジウム
第13回	2021年10月23日(土)	オンライン	丸岡慎弥	模擬授業Ⅰ
			安井政樹	模擬授業Ⅱ
			藤永啓吾	模擬授業Ⅲ
			浅見哲也	
			坂本哲彦	シンポジウム
第14回	2021年12月4日(土)	オンライン	温品賢二	模擬授業
			白井俊	シンポジウム
			永田繁雄	
第15回	2022年2月19日(土)	オンライン	中川穂	実践発表Ⅰ
			池永真依子	実践発表Ⅱ
			温品賢二	
			森重孝介	パネルディスカッション
			藤永啓吾	

2. 方法

2-1 調査時期

本研究は、2021年12月に実施された「学びの会」終了後に行われた。

2-2 調査対象者

本研究の調査対象者は道徳学びの会参加者のうち回答が得られた63名が調査対象者であった。

2-3 材料

本研究では以下の質問項目を設定した。1. 性別 2. 職務年数 3. 所属校種 4. 専門(1. 道徳、2. 教科、3. 生徒指導、4. マネジメント) 5. 参加回数 6. 学びの会参加に対する意識を尋ねる項目を尋ねた。項目は、これからも参加したい、次の開催を楽しみにしている、同僚に知らせたい、他教科の授業づくりに役立つ、幼小中高を選ばず役立つ、教育相談や生徒指導にも有効だ、法定研修で行われてもよい、「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりに役立つ、最新の教育の話題について知ることができる、であった。回答は7件法であった。7. 道徳の授業イメージに関する項目を尋ねた。項目の内容は、表8に示す。

2-4 手続き

本研究の調査は学びの会終了後に、参加者に解凍用ウェブサイトのアドレスが示され、調査に回答したものはウェブサイトへアクセスして回答した。回答には5分程度を要した。

3. 結果

属性に関する質問項目の結果を示す。表2に性別と学校種のクロス集計表を示す。

表2 性別と学校種のクロス集計表

	男性	女性	合計
幼稚園	0	0	0
小学校	20	18	38
中学校	5	8	13
特別支援学校関連	1	0	1
教育委員会等	5	1	6
その他(大学生、大学院生、企業など)	2	1	3
合計	33	28	61

表3に性別と専門のクロス集計表を示す。

表3 性別と専門のクロス集計表

	男性	女性	合計
教科指導	20	12	32
生徒指導	3	3	6
特別支援関連	2	4	6
ICT 関連 (プログラミングを含む)	3	2	5
評価関連	1	1	2
マネジメント	5	3	8
学級経営	0	2	2
その他	1	1	2
合計	35	28	63

表4に学校種と専門のクロス集計表を示す。参加者は男性が68名、女性が104名であった。

表4 学校種と専門のクロス集計表

	幼稚園	小学校	中学校	高校	教育委員会等	その他
教科指導	0	23	8	0	0	1
生徒指導	0	5	0	0	0	1
特別支援関連	0	3	1	0	0	1
ICT 関連	0	3	0	0	1	1
評価関連	0	0	1	0	1	0
マネジメント	0	1	3	0	4	0
その他	0	3	0	0	0	2
合計	0	38	13	0	6	6

表5に学校種とこれまでの学びの会の参加回数のクロス集計表を示す。調査時に初めての参加だったものは、63名中の22名であった。

表5 学校種と参加回数のクロス集計表

	1	2	3	4	5回以上
幼稚園	0	0	0	0	0
小学校	16	13	3	1	5
中学校	3	0	3	2	5
特別支援学校関連	0	0	0	0	1
教育委員会等	2	4	0	0	0
その他(大学生、大学院生、企業など)	1	0	3	0	1
合計	22	17	9	3	12

表6に学校種と職務年数のクロス集計表を示す。20年以上という回答をしたものが17名であった。

表6 学校種と職務年数カテゴリのクロス集計表

職務年数カテゴリ	小学校	中学校	教育委員会等	特別支援学校	その他	合計
10年未満	16	1	0	0	1	18
20年未満	17	5	3	1	2	28
20年以上	5	7	3	0	2	17
合計	38	13	6	1	5	63

表7に学びの会に対する意識に関する質問項目の回答についての平均値、標準偏差、中央値を示す。得られた要約統計量は男女別に示している。

表7 意識に関する質問項目の平均値、標準偏差

項目	性別	平均値	標準偏差	中央値
Q2-1 学びの会にはこれからも参加したいと思う	女性	6.82	0.48	7.00
	男性	6.63	0.65	7.00
Q2-2 学びの会の次の開催を楽しみにしている。	女性	6.75	0.59	7.00
	男性	6.66	0.64	7.00
Q2-3 学びの会のことについて同僚に知らせたい	女性	6.25	1.11	7.00
	男性	6.37	0.81	7.00
Q2-4 学びの会の内容は道徳以外の教科の授業づくりに役立つ	女性	6.46	0.84	7.00
	男性	6.17	1.01	7.00
Q2-5 学びの会の内容は幼小中を選ばず役立つ	女性	6.14	1.01	6.00
	男性	6.11	1.05	6.00
Q2-6 学びの会の内容は教育相談や生徒指導にも有効だ	女性	6.11	1.03	6.00
	男性	5.83	1.18	6.00
Q2-7 学びの会の内容は「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりに役立つ	女性	6.75	0.59	7.00
	男性	6.31	0.99	7.00

表8に、道徳の授業のイメージについて尋ねた項目の回答の平均値、標準偏差、中央値を示す。

表8 男女別の道徳の授業イメージの平均値、標準偏差、中央値

項目	性別	平均値	標準偏差	中央値
Q3-1 道徳の授業は児童生徒が自らの価値を発見する時間である	女性	5.64	6.00	0.62
	男性	5.54	6.00	0.66
Q3-2 道徳の授業は児童生徒自身の問題を仮説検証や試行錯誤によって授業の課題を解決する時間である	女性	4.79	5.00	1.17
	男性	4.71	5.00	1.13
Q3-3 道徳の授業の時間では教科書や教材の内容を正しく伝えることが最も重要である	女性	2.79	2.00	1.40
	男性	2.91	3.00	1.52
Q3-4 道徳の授業でも情報モラルやLGBTの理解などの現代の社会的問題の理解を深めることができる時間である	女性	5.25	6.00	0.93
	男性	4.80	5.00	0.93
Q3-5 他教科で学んだことを道徳の授業に生かす時間である	女性	4.43	4.50	1.23
	男性	4.74	5.00	1.07
Q3-6 道徳の授業で扱う内容にはそれぞれの授業で唯一の正しい答えがあると思う	女性	1.82	1.00	1.36
	男性	1.74	1.00	1.07
Q3-7 授業で取り上げる道徳的価値は児童生徒の生き方の自覚とは関係ない場合もある	女性	2.32	2.00	1.47
	男性	2.40	2.00	1.35

表9に道徳の授業イメージに関する項目の相関係数を示した。

表9 道徳の授業イメージの相関係数

	Q3-1	Q3-2	Q3-3	Q3-4	Q3-5	Q3-6	Q3-7
Q3-1	—						
Q3-2	0.25 *	—					
Q3-3	0.11	0.44 ***	—				
Q3-4	0.48 ***	0.1	0.06	—			
Q3-5	0.21	0.43 ***	0.37 **	0.16	—		
Q3-6	0.07	0.29 *	0.58 ***	0.06	0.34 **	—	
Q3-7	-0.1	0.07	0.26 *	-0.06	0.07	0.52 ***	—

Note. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表 10 に道徳の授業イメージに関する項目の因子分析結果を示した。表 10 には因子負荷量を示した。

表 10 道徳の授業イメージの因子分析結果

	1	2	共通性
Q3-6 道徳の授業で扱う内容には、それぞれの授業で唯一の正しい答えがある	0.99	0.05	0
Q3-3 道徳の授業の時間では教科書や教材の内容を正しく伝えることが最も重要である	0.57	0.11	0.65
Q3-7 授業で取り上げる道徳的価値は、児童生徒の生き方の自覚とは関係ない場合もある	0.54	-0.13	0.7
Q3-1 道徳の授業は児童生徒が自らの価値を発見する時間である	-0.01	0.87	0.24
Q3-4 道徳の授業でも情報モラルやLGBTの理解などの現代の社会的問題の理解を深めることができる時間である	0.01	0.55	0.7

F1 を、道徳の授業に対する「学習者分離的授業」イメージと呼ぶこととした。F2 を道徳の授業に対する「学習者関与的授業」イメージと呼ぶこととした。

道徳の授業に対する「学習者分離的授業」イメージ因子と道徳の授業に対する「学習者関与的授業」イメージについて、それぞれの平均値と標準偏差、因子間の相関係数を算出し、表 11 に示した。

表 11 道徳の授業イメージの因子別の平均値、標準偏差、中央値

	平均値	標準偏差	中央値
「学習者分離的授業」イメージ	2.32	1.18	2.00
「学習者関与的授業」イメージ	4.32	0.62	4.33

表 12 に、道徳の授業イメージの因子について、男女別の平均値、標準偏差、中央値を示す。

表 12 道徳の授業イメージの男女別の平均値、標準偏差、中央値

		平均値	標準偏差	中央値
「学習者分離的授業」イメージ	女性	2.30	1.25	2.00
	男性	2.33	1.14	2.00
「学習者関与的授業」イメージ	女性	4.40	0.70	4.33
	男性	4.25	0.55	4.00

表 13 に道徳の授業イメージの因子について、職務年数カテゴリ別の平均値、標準偏差、中央値を示す。

表 13 道徳の授業イメージの職務年数カテゴリ別の平均値、標準偏差、中央値

	職務年数カテゴリ	平均値	標準偏差	中央値
「学習者分離的授業」イメージ	10年未満	2.53	1.44	2.25
	20年未満	2.21	1.14	2.00
	20年以上	2.26	0.97	2.00
「学習者関与的授業」イメージ	10年未満	4.31	0.57	4.17
	20年未満	4.40	0.69	4.33
	20年以上	4.18	0.57	4.00

表 14 に道徳の授業イメージの因子間相関を示した。図 1 に道徳の授業イメージの因子間の散布図を示す。

表 14 道徳の授業イメージの因子間の相関係数

	a	b
「学習者分離的授業」イメージ a	—	
「学習者関与的授業」イメージ b	0.38**	—

Note. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

2 因子間の相関係数は $r = 0.38$ と中程度の相関であった。各因子ともに、データの分布は平均値を頂点とする山型であった。

道徳の授業イメージについて、道徳の授業イメージの因子を参加者内要因、回答者の職務年数カテゴリを参加者間要因とする 2 要因分散分析を行った。その結果、因子の主効果は有意 ($F(1, 60) = 187.84, p < .01, p = .76$)、勤務年数カテゴリは有意ではなかった ($F(2, 60) = 0.30, ns, p = .01$)。2 要因の交互作用は有意ではなかった ($F(2, 60) = 0.80, ns, p = .03$)。各条件における平均値と標準誤差を図 2 にプロットした。

2 つの授業イメージについて、学習者関与的授業イメージは学習者分離的授業イメージよりも勤務年数カテゴリを問わず高く評定されており、年数によって評価が変動することはないことが示された。この結果は、先行研究 (沖林ら, 2021) を追認するものであった。

学習者関与的授業イメージを促進する要因を検討するために、学習者関与的授業を従属変数とする重回帰分析を行った。重回帰分析の結果を表 15 に示す。Q4-7 は分析には不適であったため除外した。学習者関与的授業に影響を及ぼすのは、Q3-1、Q3-4、Q3-6 であった。これら 3 項目のうち交互作用があったのは、Q3-1 と Q3-4 であった ($\beta = 0.26, SE = 0.11, p = .021$)。

学習者関与的授業イメージを従属変数、「Q3-1 道徳の授業は児童生徒が自らの価値を発見する時間である」、「Q3-4 道徳の授業でも情報モラルや LGBT の理解などの現代の社会的問題の理解を深めることができる時間である」を共変量とする一般化線形モデルによる分析を行った ($AIC = 86.01, \chi^2 = 0.21$)。共変量による影響を表 16 に示す。また学習者関与的授業を従属変数として、「Q3-1 道徳の授業は児童生徒が自らの価値を発見する時間である」の影響における「Q3-4 道徳の授業でも情報モラルや LGBT の理解などの現代の社会的問題の理解を深めることができる時間である」の調整効果を図 3 に示す。

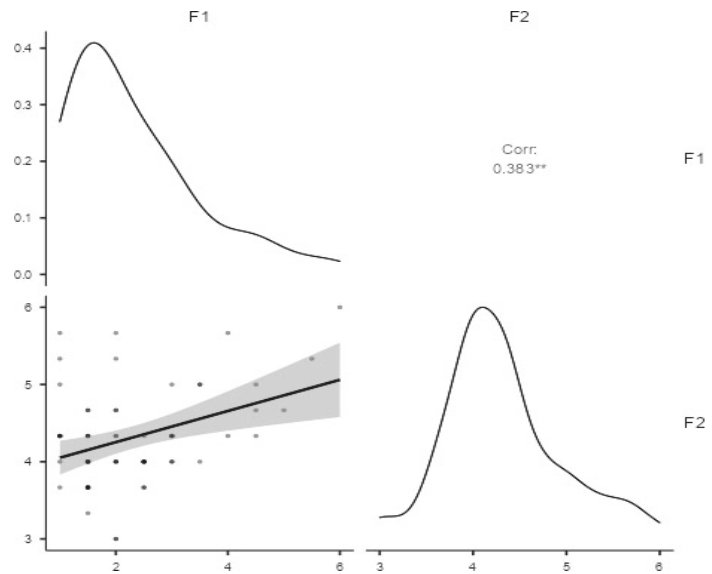


図 1 道徳の授業イメージの因子散布図

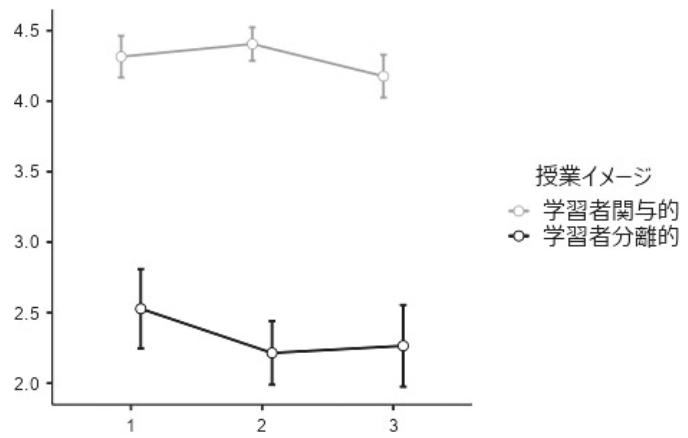


図 2 職務年数カテゴリにおける道徳の授業イメージの因子別の平均値

表 15 学習者関与的授業と道徳科の授業イメージの重回帰分析

	推定値	SE	95% Confidence Interval		t	p
			Lower	Upper		
Intercept	1.08	0.48	0.12	2.04	2.25	0.028
Q3-1	0.26	0.1	0.07	0.45	2.73	0.008
Q3-2	-0.01	0.05	-0.12	0.1	-0.19	0.852
Q3-3	-0.01	0.05	-0.1	0.08	-0.21	0.833
Q3-4	0.32	0.06	0.19	0.44	5.1	<.001
Q3-5	-0.03	0.05	-0.14	0.08	-0.57	0.571
Q3-6	0.23	0.05	0.12	0.33	4.17	<.001

表 16 学習者関与的授業イメージに影響を及ぼす道徳科の授業イメージ

	推定値	SE	exp(B)	95% Confidence Interval		z	p
				Lower	Upper		
(Intercept)	4.25	0.07	69.98	61.47	79.68	64.17	<.001
Q3-1	0.41	0.12	1.51	1.18	1.92	3.31	0.002
Q3-4	0.3	0.07	1.35	1.18	1.55	4.25	<.001
Q3-1 * Q3-4	0.24	0.11	1.27	1.02	1.59	2.12	0.038

単純効果検定の結果、Q3-4の-1SDは有意ではなく ($\beta = 0.18$, $SE = 0.11$, $p = 0.105$)、+1SDで有意であった ($\beta = 0.64$, $SE = 0.20$, $p = 0.002$)。図 3 においても、学習者関与的授業を Q3-4 の +1SD が -1SD よりも有意に促進していることがわかる。

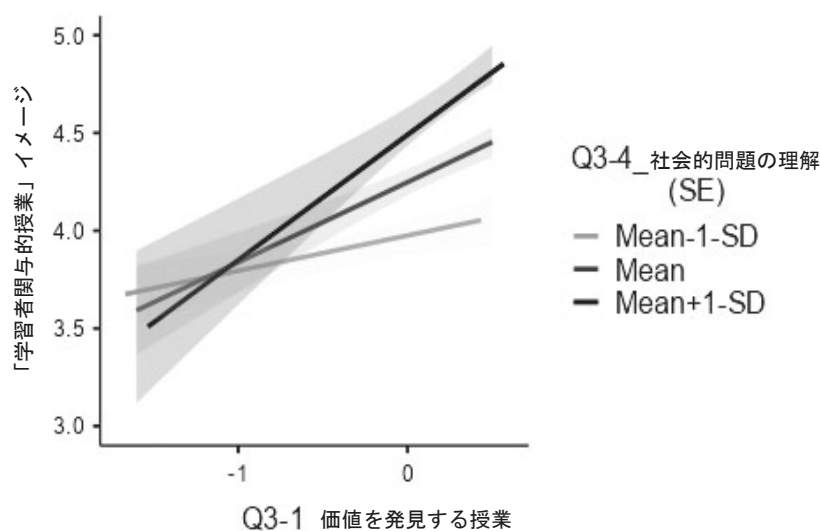


図 3 「学習者関与的授業」イメージに対する道徳科の授業イメージの調整効果

4. 考察

本研究では、「学びの会」の参加者に対する調査を行い、学びの会に対する意識や満足度の調査を行った。調査の結果、以下のことが明らかとなった。これまでの先行研究における調査（沖林ら、2020；2021）でも示されたように、参加者の学びの会に対する高い参加意識や満足感が示された。このことは、学びの会に対するニーズは一過性のものではないことが示された。学びの会が高い評価を得続けている理由については、教科に対するニーズが高いことや研修方法や講演者の評価が高いことなどが考えられる。学びの会でこれまでよりも広いテーマを扱うことによって、より多くの参加者の関心を募ることができるのではないだろうか。今後は、参加者の満足感に関する質的分析を行うことや、講演者などに対するインタビューを行うことで、学びの会のニーズに関する多面的な分析が可能となる。

本研究では、道徳科の授業に対する学習者関与的授業イメージを促進する要因を検討した。一般化線形モデルによって学習者関与的授業イメージにおける「Q3-1 道徳の授業は児童生徒が自らの価値を発見する時間である」の影響における「Q3-4 道徳の授業でも情報モラルやLGBTの理解などの現代の社会的問題の理解を深めることができる時間である」の調整効果を示した。この結果は、道徳科の授業を学習者が自分自身の価値を発見したり、自分自身の課題解決の場面であると考えている教員は道徳科の授業を児童生徒の価値の発見の時間であると考えていること、さらに、道徳科の授業で現代の社会的問題の理解の時間としてとらえていることを示している。

Education2030 は、現代的な幸福感に対応する用語としてウェルビーイングを提唱している (OECD、2019)。ウェルビーイングとは 11 の要因によって構成される複合的な満足度である。ウェルビーイングを高めるための要因として、エージェンシーの重要性が指摘されている。エージェンシーとは主体的に問題に取り組む態度である。ウェルビーイングを高める生徒エージェンシーとは、目標を設定し、行動し、振り返ることを繰り返しながら自分や世界を変えていく力 (柄本、2022) とされる。道徳科の授業を学生関与的授業イメージでとらえている教員は、道徳科の授業を児童生徒のウェルビーイングを高める時間としてとらえている可能性が指摘される。

引用文献

- 柄本健太郎 (2022): 「OECD E2030 とコロナ禍における教育」,
<https://www2.u-gakugei.ac.jp/~jisedai/KoronakaNoKyouiku/> (最終閲覧日 2022 年 5 月 9 日)
- 文部科学省 (2017): 「小学校学習指導要領 (平成 29 年度告示) 解説」, 特別の教科 道徳編.
- OECD (2019): 「OECD Future of Education and Skills 2030 Conceptual learning framework Concept note: OECD Learning Compass 2030」 <https://www.oecd.org/education/2030-project/> (最終閲覧日 2022 年 5 月 9 日)
- 沖林洋平・松岡敬興・森重孝介・上川里穂・久保田高嶺・藤永啓吾 (2020): 「「特別の教科 道徳 学びの会」参加者の意識調査」, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 50, 11-18.
- 沖林洋平・松岡敬興・森重孝介・久保田高嶺・藤永啓吾 (2021): 「「特別の教科 道徳 学びの会」参加者の意識調査 (2)」, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 52, 45-52.